

ソースモニタリング能力に関する発達的研究 —提示情報が幼児の発話者の識別に及ぼす影響—

広島大学大学院教育学研究科 近藤 綾

Developmental change in source monitoring ability: Information that affects young children's identification of source persons

Hiroshima University Graduate School of Education KONDO, Aya

要約

本研究は、年少児、年中児、年長児の4-6歳の幼児期を対象として、発話者の音声（男性もしくは女性）を識別するソースモニタリング能力に関して、提示情報が及ぼす影響と発達の変化を調べた。学習段階では提示情報、すなわち、情報量と文脈を操作した4課題を設定して男女の音声で情報を提示した。情報量は、単語か文かで操作し、文脈は、単語もしくは文が発話者の自己紹介文脈の中で発話されるか否かで操作した。テスト段階では、参加児に発話者を識別させるソースモニタリングテストを実施して4つの情報源（男性、女性、両方、ない）から判断させた。その結果、年齢が上がるにつれてソースモニタリングの正確さが増すという発達の変化が示唆された。また、年齢により提示情報が及ぼす影響が異なることが明らかとなった。そして、幼児は2つの情報源から提示される共通情報（両方）の判断が最も困難であることが示された。

【キー・ワード】 幼児, ソースモニタリング, 記憶の発達

Abstract

The present study examines the information affecting young children's performance of source monitoring through male and female speaker identification tasks. Four-, 5-, and 6-year-olds participated in the study. The participants were assigned to four conditions: a word condition in which a speaker read a list of words, a word-context condition in which a speaker read a list of words described as the speaker's favorite words, a sentence condition in which a speaker read a list of sentences, and a sentence-context condition in which a speaker read a list of sentences described as the speaker's self-introduction. In the source monitoring test, children were asked to identify the source of the information by means of alternatives (Male only, Female only, Both, Neither). Results showed that a) source monitoring accuracy was increased with age, b) there were age-related differences among the four conditions, and c) "Both" judgment was

especially difficult for young children. The results are discussed from the perspective of developmental change in the underlying process of source monitoring.

【Key words】 Young children, Source monitoring, Memory development

問題と目的

子どもの証言能力を構成する基礎能力を明らかにし、周知させることは、近年、極めて重要な課題である。証言に必要な能力の1つにソースモニタリングがある。これは、自分が知っている知識をどのようにして獲得したのかについて認識すること、つまり、情報源の記憶の想起に関する認知プロセス (Johnson, Hashtroudi, & Lindsay, 1993) である。

近年、子どものソースモニタリング能力に関する研究は、証言能力に関わる重要な能力であることから欧米を中心に研究されつつある (e.g., Foley, Johnson, & Raye, 1983; Thierry & Pipe, 2009)。一方、我が国の現状としては、成人を対象とした研究は増えつつあるが、子どもを対象とした研究はほとんど行われていない (近藤, 2008, 2009; Naito, 2003; Sugimura, 2008)。しかし、我が国においても子どもが供述を求められる事例は後を絶たず (仲・上宮, 2005), 虐待の件数は年々増加の一途をたどっている (数井, 2009)。従って、子どものソースモニタリング能力の発達について実証的なデータにもとづく知見を提供していく必要性がうかがえる。

Johnson et al. (1993) は、ソースモニタリングを3種類に分類し、理論的枠組みを提唱している。第1に、外的に得られた情報の情報源に関する外部情報のソースモニタリングである (例: 情報をA君から聞いたのか、Bちゃんから聞いたのか)。第2に、内的に得られた情報の情報源に関する内部情報のソースモニタリングである (例: 夢で見たのか、想像したのか)。第3に、情報源が外的か内的かを区別するリアリティモニタリングである (例: 実際に鍵を閉めたのか、閉めようと考えただけなのか)。そして、分類されたソースモニタリングのうち、外部情報のソースモニタリングは、児童期以降に発達するとされているリアリティモニタリングや内部情報のソースモニタリングよりも、比較的早い4-6歳の幼児期の間急速に発達することがこれまでに明らかにされている (Drummy & Newcombe, 2002; Foley, et al., 1983; Gopnik & Graf, 1988; Kovacs & Newcombe, 2006; Lindsay, Johnson, & Kwon, 1991)。

しかし、ソースモニタリング研究がされはじめてまだ日が浅いという背景から、幼児期の外部情報のソースモニタリング能力の発達研究はあまり進んでおらず、要因の影響や幼児期の発達の変化について十分に明らかになったとは言い難い。具体的には、従来の外部情報のソースモニタリング能力に関する研究では、様々な種類の提示情報 (単語、文、物語、文脈といった提示する情報の内容) が刺激材料として使用されている (e.g., Kovacs & Newcombe, 2006; Lindsay et al., 1991; Ruffman, Rustin, Garnham, & Parkin., 2001)。そして、従来の研究からは、提示情報がソースモニタリングに及ぼす影響とそれらの発達の変化が予測されるが、提示情報の影響についてはこれまでのところ検討されていないのである。

日常を考えた場合、人は特定の文脈内における様々な提示情報からソースモニタリングを行うとい

える。そのため、幼児が日常的に行うソースモニタリングについて明らかにするにあたり、提示情報の要因に着目し、幼児期の発達的变化を明らかにすることは重要であると考えられる。また、この点について明らかにすることは、ソースモニタリング能力の発達のメカニズムの一端を探る上でも有益であると考えられる。そこで、本研究では、外部情報のソースモニタリングに影響を及ぼすと考えられる提示情報の要因について取り上げ、それらの影響と発達的变化を明らかにすることを目的とする。つまり、外部情報のソースモニタリング研究に代表される Lindsay et al. (1991) の男性と女性の音声を情報源として発話者を識別する課題を参考とし、提示情報について情報量と文脈を操作する 4 課題 (単語課題, 好きな単語課題, 文課題, 自己紹介文課題) を設定する。そして、単語課題をもとに課題間を比較することにより、提示情報が幼児の外部情報のソースモニタリングに及ぼす影響を発達的に検討する。

近藤 (2009) は、提示情報が幼児の外部情報のソースモニタリングに及ぼす影響について、年少児, 年中児, 年長児 (4-6 歳児) を対象に発達の検討を行った。すなわち、学習段階に各年齢の参加児の半数には男性と女性の各音声で単語を提示する単語課題を提示し、残りの半数には自己紹介という文脈の中で (初めにあいさつや名前が聞かされる) 発話者に関する文情報が提示される自己紹介文課題を提示した。そして、テスト段階ではソースモニタリングテストを行い 4 つの情報源 (男性の声で聞いた, 女性の声で聞いた, 男性と女性の両方の声で聞いた, 聞かなかった) から発話者を識別させた。その結果、年中児以降では単語課題よりも自己紹介文課題の成績が高く、提示情報によりソースモニタリングの正確さが異なることが示唆された。また、どの年齢においても 2 つの情報源から提示される共通情報、つまり男性と女性の両方から情報が提示されたと判断することが困難であることが示された。

しかし、近藤 (2009) で比較された 2 つの課題の差異は、以下の点について明らかでない。すなわち、2 課題の差異は、単語情報と文情報により生じたのか、自己紹介という文脈により生じたのかである。従って、本研究ではこの点についてより明確化するために 2 つの課題を追加する。具体的には、自己紹介文脈の中で単語が提示される好きな単語課題と、無関連な文情報が次々と提示される文課題を追加し、提示情報が幼児のソースモニタリングに及ぼす影響と発達的变化について体系的に明らかにする。

加えて、本研究では、近藤 (2008, 2009) において示唆された、幼児は 2 つの情報源から提示される共通情報の判断が困難であることについても考慮する。共通情報の判断の正確さは、証言能力の信憑性を考慮すると極めて重要な判断といえる。なぜなら、誰が何と言ったかを識別する場合においては、各発話者の識別に加えて、発話者が 2 人とも言ったと正確に判断することも重要な判断の 1 つと考えられるからである。しかし、近藤 (2008, 2009) の研究を除く幼児を対象とした従来の研究では、共通情報の判断の正確さについては検討されていない。従って、本研究では、幼児は共通情報の判断が行えないのか、あるいは、提示情報により共通情報は判断可能になるのかについても確認する。

方 法

実験計画

3(年齢：年少児，年中児，年長児)×4(課題：単語課題，好きな単語課題，文課題，自己紹介文課題)×4(情報源：男性，女性，両方，ない)の3要因計画であり，第3要因のみ参加者内要因であった。

参加児

年少児(平均年齢4歳2ヵ月；範囲3:7-4:8；男児51名，女児49名)，年中児(平均年齢5歳2ヵ月；範囲4:7-5:8；男児47名，女児53名)，年長児(平均年齢6歳2ヵ月；範囲5:6-6:7；男児53名，女児47名)，各年齢100名の計300名であり，各年齢を25名ずつ4課題に振り分けた。

実験装置

ノート型パーソナルコンピューター(SONY VAIO VGN-TX50B)にオーディオスピーカー2台(EXCEL SOUND ESP-757pw)を接続して男女の音声を提示した。

材料

刺激語 近藤(2008)の中間報告に記した手順で作成した刺激語を使用した。なお，2回の練習課題では，全ての参加児に対して単語を提示した。つまり，1回目の練習課題では学習段階に，男性の音声で2単語，女性の音声で2単語を提示した。各2単語のうち，1単語は男性か女性の音声だけで提示したが，残りの1単語は男性と女性の両方の音声で提示した。テスト段階では，学習段階の3単語に初めて聞く1単語を追加し，1回目の練習課題で提示する単語の合計は4単語であった。また，2回目の練習課題では倍の8単語を提示した。

本課題では学習段階に，男性の音声で10単語/文，女性の音声で10単語/文を提示した。各10単語/文のうち，5単語/文は男性か女性の音声だけで提示したが，残りの5単語/文は男性と女性の両方の音声で提示した。各発話者が刺激語を読み上げる時間は，単語課題と好きな単語課題では約50秒であり，文課題と自己紹介文課題では約1分50秒であった。

テスト段階では，学習段階の15単語/文に初めて聞く5単語/文を追加し，合計で20単語/文を提示した。テスト段階で実験者が質問する単語は，質問順序が異なるように5種類のリストを作成し，実験では参加児ごとにランダムにリストを変えて質問した。なお，テスト段階で使用するリストの作成にあたっては，同じ情報源の単語が2回以上連続して続かないように配慮した。

選択肢カード ソースモニタリングテストでは，Bright-Paul, Jarrold, & Wright(2005)が，幼児のソースモニタリングテストでは，各情報源を表す4枚の絵を補足的に用いて情報源を選択させることの有用性を明らかにしていることを参考にカードを使用した。カードは縦13cm×横19cmの1枚の白画用紙に4枚の絵を貼り付けたものであった。4枚の絵は，男性の音声で提示されたことを表す男性の顔の絵，女性の音声で提示されたことを表す女性の顔の絵，男性と女性の両方から提示されたことを表す男性と女性の二人の顔の絵，提示されなかったことを表す真っ白なものであった。なお，男女の顔の絵は学習段階の2台のスピーカーにもそれぞれ貼り付けた。

手続き

実験は静かな部屋で個別に実施した。実験者は参加児とテーブルを挟んで向かいの椅子に座り、テーブルの左右にスピーカーを置いた。まず練習課題を実施し、実験者は「これからクイズをするけど、まずはやり方を練習するね。」と教示し、各スピーカーから音声聞こえてくること、練習の時にはヒントを出すことを説明した後に各音声を提示した。男性と女性のどちらの音声を先に提示するかは、学習段階と一致させた。1回目の練習課題において男性と女性のそれぞれの音声を提示した直後、実験者は「クイズの答え方を教えるね。」と教示し、学習段階に提示した単語に、テスト段階で初めて聞く単語を含めて、再認テストとソースモニタリングテストでの答え方を説明した。なお、質問に答えられない場合にはヒントとして何度も単語を提示し、選択肢カードを用いて、参加児が完全に質問を理解できるようにした。続く2回目の練習課題では、単語数が倍になったこと、ヒントをあまり与えなかったことを除いては1回目の練習課題と同様に行った。全ての参加児は、2回の練習課題をとおして一連の流れを理解し、正しく解答できていた。

練習課題直後に本課題を実施した。学習段階において実験者は、「本番に入るよ。さっきみたいに、男の人と女の人の声を聞いてね。それでは始めるね。」と教示し、各音声で単語/文を提示した。好きな単語課題と自己紹介文課題では、情報提示前に各発話者が名前を含めたあいさつをし「これから好きなものを言います/自己紹介をします」と告げた後、単語情報や文情報を提示した。なお、どちらの音声を先に聞くかはカウンターバランスをとった。学習段階終了直後、実験者は2台のスピーカーを参加児から見えない場所に移した。

テスト段階では、実験者は「これからさっき聞いたものについて、私がクイズをだすから答えてね。」と説明し、まず再認テストにおいて「○○は聞いた？聞かなかった？」と尋ねた。次に、ソースモニタリングテストにおいて「○○は男の人の声で聞いた？女の人の声で聞いた？男の人と女の人の両方の声で聞いた？それとも、聞かなかった？」と尋ね、一呼吸置いてから「答えはこの4つの絵の中でどれなのか指さして教えてくれる（選択肢カード）？」と教示して参加児に情報源を選択させた。

結果

表 1 各年齢における再認テストの各指標の平均値と標準偏差 (SD)

	単語課題	好きな単語課題	文課題	自己紹介文課題
ヒット率(%)				
年少児	0.78 (0.19)	0.87 (0.12)	0.89 (0.15)	0.84 (0.15)
年中児	0.78 (0.18)	0.85 (0.13)	0.90 (0.12)	0.91 (0.11)
年長児	0.79 (0.22)	0.84 (0.15)	0.94 (0.08)	0.94 (0.08)
FA率(%)				
年少児	0.16 (0.29)	0.26 (0.30)	0.36 (0.36)	0.44 (0.44)
年中児	0.18 (0.27)	0.19 (0.31)	0.31 (0.37)	0.17 (0.22)
年長児	0.11 (0.22)	0.08 (0.12)	0.20 (0.34)	0.13 (0.25)
再認率(d')				
年少児	1.98 (0.89)	1.95 (0.84)	1.67 (1.06)	1.28 (1.10)
年中児	1.92 (0.74)	2.08 (0.85)	1.86 (1.09)	2.38 (0.72)
年長児	2.15 (0.83)	2.42 (0.54)	2.34 (1.05)	2.59 (0.82)

再認テスト

年齢における再認テストの各指標の平均値と標準偏差 (SD) を表 1 に示す。再認テストにおけるヒット率、FA 率、再認率の各指標について 3 (年齢：年少児、年中児、年長児) × 4 (課題：単語課題、好きな単語課題、文課題、自己紹介文課題) の 2 要因分散分析を参加者間要因で行った。以下の統計的分析では有意水準を 5% に設定した。なお、再認率(d')の算出では、ヒット率が 1 になる場合や FA 率が 0 になる場合があったため、ヒット率と FA 率のそれぞれに 0.5 を加える補正を行った上で統計的分析を実施した。その結果、ヒット率では課題の主効果に有意な差があったため ($F(3,288)=11.61, p<.001$) 下位検定を行った。なお、主効果の下位検定についての以下の分析では常に Ryan 法を用いた。下位検定の結果、単語課題よりも好きな単語課題、文課題、自己紹介文課題の値が有意に高かった。FA 率では、年齢の主効果 ($F(2,288)=8.32, p<.001$) と課題の主効果 ($F(3,288)=3.42, p<.05$) に有意な差があり、下位検定の結果、年齢の主効果については、年少児は年中児と年長児よりも提示されなかった情報に対して提示されたとする誤りが多かった。また、課題の主効果については、単語課題と好きな単語課題よりも、文課題のほうが提示されなかった情報に対して提示されたとする誤りが多かった。再認率では、年齢の主効果 ($F(2,288)=13.51, p<.001$) と年齢と課題の交互作用 ($F(6,288)=2.71, p<.05$) に有意な差があり、下位検定の結果、年齢の主効果については年少児、年中児、年長児の順に値が有意に高かった。また、年齢と課題の交互作用が有意な大きさであったため、年齢別に課題の単純主効果について検討した結果、文課題では、年少児よりも年長児の値が有意に高く、自己紹介文課題では、年少児よりも年中児と年長児の値が有意に高かった。

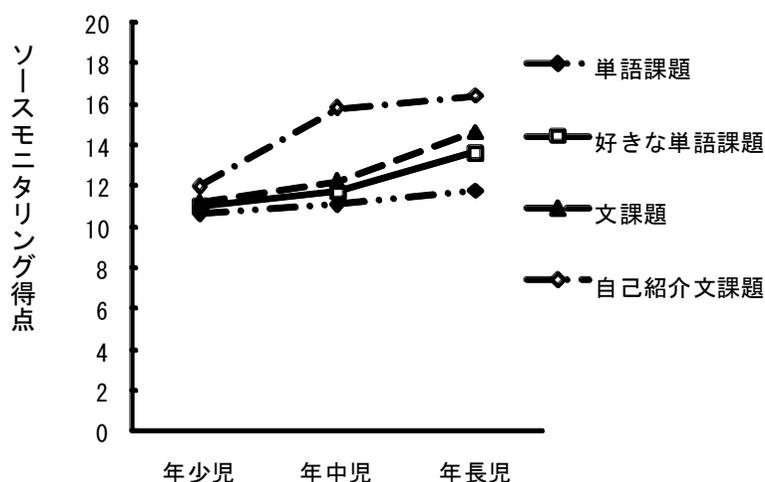


図1 各年齢における4課題のソースモニタリングテスト得点の平均

表2 各年齢における課題と情報源ごとのソースモニタリングテスト得点の平均値(SD)

	単語課題	好きな単語課題	文課題	自己紹介文課題
年少児				
全体	10.64** (2.27)	11.00** (3.73)	11.16** (3.31)	11.96** (3.25)
男性	3.28** (1.10)	2.92** (1.29)	3.12** (1.59)	3.48** (1.12)
女性	2.52** (1.23)	2.68** (1.41)	2.96** (1.51)	3.44** (1.36)
両方	<u>0.64**</u> (0.70)	1.68 (1.70)	1.88 (1.56)	2.20* (1.58)
ない	4.20** (1.47)	3.72** (1.49)	3.20** (1.80)	2.84** (2.13)
年中児				
全体	11.08** (3.19)	11.68** (2.59)	12.20** (3.04)	15.76** (2.67)
男性	3.04** (1.57)	3.20** (1.32)	3.04** (1.54)	4.60** (0.87)
女性	2.88** (1.51)	3.16** (1.31)	3.00** (1.41)	4.08** (0.91)
両方	1.00 (1.26)	1.28 (1.10)	2.68** (1.63)	2.92** (1.41)
ない	4.16** (1.37)	4.04** (1.57)	3.48** (1.78)	4.16** (1.11)
年長児				
全体	11.76** (2.83)	13.60** (2.69)	14.60** (2.80)	16.36** (2.60)
男性	2.96** (1.57)	3.48** (1.26)	3.64** (1.32)	4.32** (1.07)
女性	2.84** (1.07)	3.20** (1.26)	3.40** (1.26)	4.44** (0.65)
両方	1.48 (1.39)	2.32** (1.22)	3.56** (1.26)	3.28** (1.49)
ない	4.48** (1.12)	4.60** (0.58)	4.00** (1.68)	4.32** (1.25)

注. *は、チャンスレベルより値が有意に高いことを示す(* $p < .05$, ** $p < .01$)。

下線の引かれた値は、チャンスレベルより値が有意に低いことを示す。

ソースモニタリングテスト

図1は、各年齢における情報源ごとのソースモニタリングテスト得点の平均を示している。また、

表 2 には、各年齢における課題と情報源ごとのソースモニタリングテスト得点の平均値と、チャンスレベル検定を行った結果を示している。ソースモニタリング得点について 3 要因分散分析を行った。その結果、年齢の主効果 ($F(2,288)=24.18, p<.001$)、課題の主効果 ($F(3,288)=19.40, p<.001$)、年齢と課題の交互作用 ($F(6,288)=2.50, p<.05$) にそれぞれ有意な差があった。下位検定の結果、年齢の主効果については、年少児、年中児、年長児の順に得点が有意に高かった。課題の主効果については、単語課題、好きな単語課題、文課題よりも自己紹介文課題の得点が有意に高かった。また、単語課題よりも文課題の得点が有意に高かった。次に、年齢と課題の交互作用が有意な大きさであったので、年齢別に課題の単純主効果について検討した。下位検定の結果、年少児では 4 つの課題間に差はなく、年中児では自己紹介文課題の得点が最も高かった。そして、年長児では単語課題の得点が最も低く、自己紹介文課題の得点が最も高かった。

情報源の主効果 ($F(3,864)=103.65, p<.001$)、課題と情報源の交互作用 ($F(9,864)=10.73, p<.001$) にもそれぞれ有意な差があったため下位検定を行った。その結果、情報源の主効果については、両方条件の得点が最も低く、ない条件の得点が最も高かった。課題と情報源の交互作用が有意な大きさであったので、条件別に課題の単純主効果について検討した結果、男性条件と女性条件では、単語課題、好きな単語課題、文課題よりも自己紹介文課題の得点が有意に高かった。両方条件では、単語課題よりも好きな単語課題の得点が有意に高く、それらよりも文課題と自己紹介文課題の得点が有意に高かった。そして、ない条件では、文課題と自己紹介文課題よりも単語課題の得点が有意に高く、文課題よりも好きな単語課題の得点が有意に高かった。

考 察

再認テストでは、再認率において年齢差が確認され、年齢とともに再認の正確さが増していくことが明らかになった。この結果は、Lindsay et al. (1991) の実験 2 や近藤 (2009) の結果と一致する。再認率において生じたこの発達差は、FA 率の発達の变化から考えられる。つまり、ヒット率ではどの年齢も同程度の成績を示すが、FA 率では、年少児は年中児や年長児よりも提示されなかった情報に対して提示されたと多く誤るのである。また、課題における再認の正確さに関して、年少児は、文課題や自己紹介文課題において再認が困難になっていた。これについては、提示情報の量と質から考えることができる。つまり、再認の未熟な年少児は単語情報よりも情報量が増えた文情報についてうまく処理することができなかつた、あるいは、年少児にとっては、自己紹介という課題の性質が、新奇な情報を既知の情報と誤って判断させる傾向を高くしたためであると考えられるのである。従って、幼児期の再認の特徴として、年少児は、再認が未熟であり、特に情報の量や課題の性質に影響を受けて新奇な情報を既知の情報とする誤りを増大させるが、年齢が上がるとともにこの誤りは減少し、再認の正確さを増していくと解釈できるだろう。

ソースモニタリングテストでは、年少児から年長児にかけてのソースモニタリング能力の発達の变化が示唆された。また、提示情報の影響が年齢により異なることが示唆された。さらに、2 つの情報源から提示される共通情報に関して課題間における成績の違いが示された。従って、これ以降ではま

ず各年齢における提示情報の影響について発達の的に論じ、その後、共知情報の判断について4つの課題の性質から考察する。

年少児の結果からは、提示情報がソースモニタリングに影響を及ぼさないことが示唆された。これは、年少児では情報量や文脈が付加されてもソースモニタリングの正確さを増さないことを意味する。言い換えれば、年少児では、提示情報を手がかりとして利用することが困難であるといえるだろう。しかし、年少児の両方条件を除いたソースモニタリング得点は、チャンスレベルよりも有意に高かったことから、年少児にも一定のソースモニタリング能力が備わっていることはうかがえる。従って、この時期の幼児はソースモニタリング能力の萌芽の段階にあるといえるだろう。

次に、年中児の特徴について考察する。単語課題を基準として提示情報の影響について確認すると、年中児のソースモニタリングには、情報量と文脈の両者が影響を及ぼすが、情報量が多く、文脈を伴う場合においてのみ正確さが増すことが示唆された。これは、年中児では、単語情報が文情報になり、自己紹介文脈が付加された場合において、それらが手がかりとして利用可能としていることを意味する。従って、年中児のソースモニタリングの正確さには、情報の量と質の両者が一緒に付加されることにより、意味活性化が生じ、痕跡強度の差異性が増してソースモニタリングが正確になると考えられるだろう。

最後に、年長児では、情報量と文脈の両者が影響を及ぼし、その影響は同程度であること、そして、提示情報は情報量が多く文脈を伴う場合にソースモニタリングの正確さに最も影響を及ぼすことが示唆された。これは、情報量と文脈の両者がそれぞれにソースモニタリングの正確さに影響を及ぼすことを意味する。情報量に関して、文情報は個々の語が符号化される単語情報とは異なり、文全体としての意味的符号化がなされるため、単語情報と比較して意味活性化が生じやすくなったと考えられる。言い換えると、文情報は単語情報よりも痕跡強度が強くなるため、結果的にソースモニタリングの正確さを増すと考えられるだろう。また、“誰が”が非常に重要な意味をもつことになる自己紹介文脈では、個々の提示情報と情報源との結びつきが強まる、つまり、提示情報に対する記憶痕跡の差異性が増して各情報源が識別しやすくなり、ソースモニタリングの正確さが増したと考えられる。よって、年長児のソースモニタリングの正確さには、情報の量と質の両者が等しく影響し、年長児はこれらを手がかりとして利用することが可能であるといえるだろう。

従って、提示情報が幼児期のソースモニタリングに及ぼす影響について次のような発達の解釈が考えられる。すなわち、ソースモニタリング能力の萌芽に位置すると考えられる年少児では、一定のソースモニタリング能力は備わっているが、提示情報を利用してソースモニタリングを行うことは難しい時期にあるといえる。しかし、年齢が増すとともに、まず与えられる手がかりが多い場合において、それらをソースモニタリングに反映させられるようになる。そして、年長児にもなれば、与えられる手がかりが少ない場合においても、それらをソースモニタリングに利用することが可能となり、より正確な判断を行えるようになると考えられるのである。以上のことから、本研究では、幼児は年齢とともに様々な手がかりを利用してソースモニタリングを行えるようになること (Kovacs & Newcombe, 2006; Lindsay et al., 1991; Roberts, 2000) に関する提示情報の利用の側面を発達の的に示唆したといえるだろう。そして、このように発達の変化を追っていくと、年長児のソースモニタリ

ング能力はある程度安定したレベルに達している可能性が考えられる。

この点に関して、ソースモニタリング能力が熟達したレベルに達している成人を対象に同様の検討を行った Sugimura & Kondo (2009) の結果からは、年長児の傾向が成人と同様の傾向を示していることが確認できる。従って、年長児は刺激数によりソースモニタリングの正確さは成人とは異なるが、成人と同様の判断プロセスを経ているといえるだろう。また、幼児と成人が同様の判断プロセスを経ていることに関しては、自己と他者の感情への焦点化がソースモニタリングに及ぼす影響について検討した成人の課題 (Johnson, Nolde, & De Leonardis, 1996) を、幼児に適した課題に変更して検討した Kovacs & Newcombe (2006) からも確認されている。従って、本研究は、提示情報の影響においても、年長児と成人が同様の判断プロセスを経てソースモニタリングを行っていることを示した点において意義があるといえるだろう。

次に、共通情報の判断について4つの課題の性質から考察する。共通情報は、情報量や文脈の付加に伴い判断の正確さが増すことが明らかになった。このことは、情報量に関しては、単語課題や好きな単語課題よりも文脈課題と自己紹介文脈課題の共通情報の判断の正確さが増した結果からいえる。また、文脈に関しては、単語課題と好きな単語課題の違いは、自己紹介文脈が付加されたか否かであるため、この場合において、単語課題よりも好きな単語課題のほうが共通情報の判断の正確さが増した結果からうかがえる。従って、幼児の共通情報の判断に関しては、情報量や文脈の付加に伴い、提示情報に対する記憶痕跡の差異性が増し、各情報源の正確さが増すとともに、共通情報の正確さも増すと考えられるだろう。

共通情報が4つの情報源の中で最も判断が困難であった結果は、近藤 (2008, 2009) と同様であった。しかし、表2の年中児と年長児の文脈課題の結果からは、共通情報の判断成績がその他の情報源の判断成績とあまり差がなく判断可能となっていることがうかがえる。これに対し、単語課題、好きな単語課題、自己紹介文脈課題では、その他の情報源の判断成績と比較して共通情報の判断成績が低いことがうかがえる。このことに関して、課題の性質を考慮すると次のような解釈が考えられる。

単語を使用した課題は、個々の情報が独立しており、発話者を識別する手がかりが少なすぎるといえる。そのため、幼児はその単語が男性、あるいは、女性で提示されたのかを判断することに多くの処理を費やすと考えられる。つまり、単語を使用した課題においては、共通情報を判断する処理資源がわずかしかないと考えられるのである。また、自己紹介文脈課題では、“誰が”言ったのかという発話者が重要となるため、発話者が個々に言った情報は、その人独自のエピソードとして捉えられる可能性がある。よって、この場合“両方の人が言った”ことは特に重要ではなくなる可能性が考えられる。このことは、男性条件と女性条件では、単語課題、好きな単語課題、文脈よりも自己紹介文脈課題の成績が有意に高かった結果からもうかがえる。つまり、文脈を使用した自己紹介文脈では、男性や女性といった発話者に焦点があたる性質を有した課題であったために、結果的に男性や女性の判断よりも共通情報の判断が困難になったと考えられるだろう。この傾向は、成人の研究を行った Sugimura & Kondo (2009) においても確認されている。従って、共通情報の判断の正確さは、どのような内容が提示されるのか、あるいは、どのような文脈で提示されるかといった状況に依存する側面がある可能性が推察できる。

本研究では、年中児以降の情報量や文脈の利用が成人の傾向へと発達していくことや、年長児にもなれば提示情報の利用が十分に可能となりソースモニタリングの正確さが増すという発達の变化を体系的に示唆した。これらのことは、ソースモニタリングの発達のメカニズムの一側面を明らかにし、日常の特定場面では、幼児でも誰が何と言ったかについてある程度正確に識別ができる可能性を示した点において意義があるといえるだろう。また、共知情報の判断は、提示される情報により正確さが異なるという性質を有していることを示した。このことから、判断の正確さが特に重要となる証言等の場面では、2つの情報源に由来する証言の信憑性に留意する必要性を提案できるだろう。最後に今後の課題を2点記す。第1に、日常場面では大抵の場合、人は状況や文脈を含んだエピソード的な一連の出来事の情報を利用してソースモニタリングを行うと考えられる。従って今後は、より高次な処理レベルを要するエピソード情報を提示刺激として、幼児の発話者の識別力を検討する必要性が考えられるだろう。第2に、本研究では、共知情報の判断がなぜ困難であるのかについては明らかになっていない。従って、共知情報の判断の困難さについても究明することが考えられる。

文 献

- Bright-Paul, A., Jarrold, C., & Wright, D. B. (2005). Age-appropriate cues facilitate source-monitoring and reduce suggestibility in 3- to 7-year-olds. *Cognitive Development*, **20**, 1-18.
- Drumme, A. B., & Newcombe, N. S. (2002). Developmental changes in source memory. *Developmental Science*, **5**, 502-513.
- Foley, M. A., Johnson, M. K., & Raye, C. L. (1983). Age-related changes in confusion between memories for thoughts and memories for speech. *Child Development*, **54**, 51-60.
- Gopnik, A., & Graf, P. (1988). Knowing how you know: Young children's ability to identify and remember the sources of their beliefs. *Child Development*, **59**, 1366-1371.
- Johnson, M. K., Hashtroudi, S., & Lindsay, D. S. (1993). Source monitoring. *Psychological Bulletin*, **114**, 3-28.
- Johnson, M. K., Nolde, S. F., & De Leonardis, D. M. (1996). Emotional focus and source monitoring. *Journal of Memory and Language*, **35**, 135-156.
- 数井みゆき (2009). 子ども虐待の現状 I 現状の概観 (特集 子ども虐待の現状と支援) 発達, **117**, 2-7.
- 近藤 綾 (2008). 外部情報のソースモニタリング能力に関する発達の研究 発達心理学研究, **19**, 47-56.
- 近藤 綾 (2009). 発話者を特定する外部情報のソースモニタリング能力に関する発達の研究: 自己紹介課題を使用した検討 発達心理学研究, **20**, 145-154.
- Kovacs, S. L., & Newcombe, N. S. (2006). Developments in source monitoring: The role of thinking of others. *Journal of Experimental Child Psychology*, **93**, 25-44.

- Lindsay, D. S., & Johnson, M. K., & Kwon, P. (1991). Developmental changes in memory source monitoring. *Journal of Experimental Child Psychology*, **52**, 297-318.
- Naito, M. (2003). The relationship between theory of mind and episodic memory: Evidence for the development of autonoetic consciousness. *Journal of Experimental Child Psychology*, **85**, 312-336.
- 仲真紀子・上宮 愛 (2005). 子どもの証言能力と証言を支える要因 心理学評論, **48**, 343-361.
- Roberts, K. P. (2000). An overview of theory and research on children's source monitoring. In K. Roberts, & M. Blades (Eds.), *Children's source monitoring* (pp.11-57). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Ruffman, T., Rustin, C., Garnham, W., & Parkin, A. J. (2001). Source monitoring and false memories in children: Relation to certainty and executive functioning. *Journal of Experimental Child Psychology*, **80**, 95-111.
- Sugimura, T. (2008). External source monitoring in real-life event: Developmental changes in ability to identify source. *Applied Cognitive Psychology*, **22**, 527-539.
- Sugimura, T. & Kondo, A. (2009) Factors affecting source memory: Effects of the amount and source-attribution level of information presented by sources. *Journal of Human Environmental Studies*, **7**, 83-88
- Thierry, K. L., & Pipe, M. E. (2009). The susceptibility of young preschoolers to source similarity effects: Confusing story or video events with reality. *Journal of Experimental Child Psychology*, **102**, 392-407.

謝 辞

論文作成にあたりご指導，ご助言いただきました福岡教育大学の杉村智子教授に心より感謝いたします。また，調査にあたりご協力いただきました，保育園の先生方，保護者のみなさま，園児のみなさまに厚く御礼申し上げます。